



会長が岡鹿之助賞を受賞しました

第91回春陽展の版画部門で、弊社の会長が岡鹿之助賞を受賞しました。

国立新美術館での展覧会は終了してしまいましたが、5月20日～25日は名古屋展、6月3日～8日は大阪展が開催されます。また、7月には渋川市美術館で個展も開かれます。チャンスがあればぜひ出かけてみてください。

「春の鎮魂歌」という作品は、東日本大震災の後に作られた作品のひとつです。

『万物が再生する春の輝きの中には、不幸にして亡くなった多くの人々の魂の存在を感じる。東日本大震災の後、私たちが多くの死者によって生かされていることを知った。春の輝きを楽しむとともに、この輝きを亡き人たちに捧げたいと思った。』

作者言

木版抽象画 渋川の高橋さん

春陽展・版画部門

スタイル貫き最高賞



長年にわたって木版画で抽象画を描いてきた版画家、高橋房雄さん(77)＝渋川市八木原＝が、第91回春陽展春陽会主催で版画部門の最高賞に当たる岡鹿之助賞を受賞した。本県関係の受賞は3人目で、「自分の絵が間違っていないかったと証明されたことがうれしい」と喜ぶ。

高橋さんは中学生のころから画家を志し、版画を独学で習得。東京都印刷会社に勤務していた26歳の時、第40回春陽展に版画を初出品し入賞した。帰郷して家業の建設業を継ぎ、一時創作を中断したものの、再開後は会社経営の傍ら作品を発表し続け、1991年に同会会員となった。

高橋さんと出品作の「春の鎮魂歌」(奥)

「自由で開放感あふれる描き方で人を感動させたい」と抽象画に取り組む。画家を志すきっかけとなったパウ・クレーの作品「陽光な食卓」から感じ取った「豊かさ」と「温かみ」を、自らの作品で表現し続けてきた。

今回の出品作の一つ「春の鎮魂歌」でも、躍動する線と画面の中の光の奥行きなどで表している。

現在は会社経営の第一線を退き、自宅のアトリエで創作に専念する。細かい線を重ねる気の遠くなるような作

業も、「私にはこのやり方しかない。この作業があるからこそ、自分の表現がある」と笑う。働きながら絵に向き合っていた若いころ、がむしやらに追求した自分のスタイルをこれからも貫き通す。

受賞を記念し、7月3～14日、渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館で個展「高橋房雄木版画展」を開く。「賞をもった以上、『年だから』とは言い訳できない。描けるところまで描いていく」ときらなる飛躍を誓った。

上毛新聞 2014年5月20日